

「成長の3年間」

6組 佐藤 里梨

「部活決まってる？アメフト部興味ない？」

校門を抜けて校舎に入るまでの道で、私は先輩に話しかけられた。

「あります。」そう答えた私にその先輩は少し驚いた表情をしながら、放課後部室に来て欲しいと言った。その先輩が驚いたのはきっと、今までそう答えた人がいなかったからだろう。

私の父は高校時代アメフト部に所属していた。ただ父の口からアメフトという言葉聞いたことはなく、父とアメフトの話をしたこともない。だからルールも知らなければラグビーと何が違うのかも分からなかった。しかし、父がアメフトをやっていたということは知っていたので、どんなものなのだろうと興味があった。

初日は話を聞くだけだったが、次からはグラウンド練習を体験しに行った。広くて綺麗なグラウンドで、大きな体の選手達が汗を流してぶつかり合う姿に圧倒された。マネージャーの先輩はてきぱきと仕事をこなし、走り回り、そして何より生き生きとしていた。私も先輩のようにかっこよくなりたい。「大変だけれど、やりがいのある部活だよ」と言う先輩の言葉も後押しになり、私は入部を決めた。ただ、現実はその上手くはいかず、毎日が失敗の連続だった。選手をサポートするためのマネージャーなのに、選手の足を引っ張ってしまっている自分に嫌気がさし、自信もなくなった。目の前のことをこなすのに必死で立ち止まる時間もなく、しっかりとしたやりがいを感じられず日々が過ぎていった。

しかし、1年目の夏合宿を終えて最初の練習で、3年生の先輩に「動けるようになったね！」と褒められた。自分では全く実感がなかったが、嬉しくてやっと自身が少し持てるようになった。それからの毎日も決して楽ではなく、マネージャーの中でぶつかることもあった。それでも、たくさんの経験を積むことで、乗り越え成長することが出来た。何より選手から「ありがとう」と言われることが本当に嬉しく、やってきて良かったと思う瞬間だった。

今なら胸を張って後輩に「大変だけれど、やりがいのある部活だよ」と言える。ダメダメだった私を FIRES のマネージャーにしてくれた17人の仲間達、最高の青春をありがとう。